

みどりの風

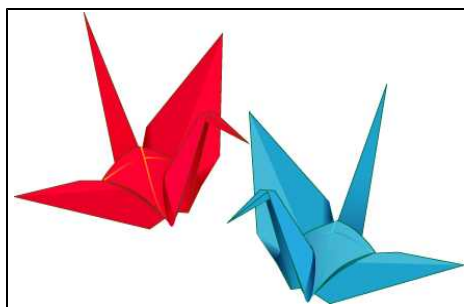
令和2年8月9日（日） 発行人：校長 角田 亮明

緑
の
誓
い

- さわやかにあいさつをします
- 進んで勉強します
- きまりを守ります
- 心をこめて掃除をします
- みんなと仲良くします

受け継ごう戦争の悲惨さを、平和の尊さを

本日8月9日は長崎に原子爆弾が投下された日。投下から75年目の節目の年を迎えました。緑丘小学校でもリモートによる平和祈念集会を開き、戦争（原爆）の悲惨さと平和の尊さについて学びを深めました。今年は、元教員で、現在、三井楽町公民館長を務めていらっしゃる上河 恵賜先生を講師としてお招きし、ふるさと五島の当時の様子を中心に話をしていただきました。実際に戦争を体験された方の生の声を聞くことが難しくなっている今、受け継ぐことが重要だと考えます。75年前に何があったのかそして、当時の人達はどんな思いをもって暮らしていたのか、乗り越えたのか。子ども達にしっかり伝えたいと願います。そういう意味を込めて、今年は事前に「戦争や平和に関する体験談」を募集しました。8つの体験談をお届けいただきました。本当にありがとうございました。ご承諾を得て、いくつかの体験談を匿名でご紹介させていただきます。



【体験談①】曾祖母の話

諫早市の白浜というところに住んでいました。

B29が山の方から長崎の方に飛んで行ったと思ったら、きこ雲が見えたそうです。それから、諫早にたくさんの負傷者が列車で運ばれて来て、曾祖母は負傷者を介護したと話していました。

【体験談②】曾祖母の話

昭和20年8月9日、曾祖母の父親は長崎市内の工場に勤務していたため、その日も朝から出勤しようとしていたが、朝から体調が悪く仕事を休みたいと言っていた。そう言っていた父親に「お国のために頑張って」と曾祖母たち家族は父親を送り出したが、その日、長崎に原子爆弾が投下され、曾祖母の父も原爆で亡くなってしまった。「あの時、無理に送り出さなければ」と、曾祖母は孫の私に涙ながらに話していた。

【体験談③】曾祖父の話

満州国国有鉄道勤務と学校の先生をしていた祖父母の間に父が生まれた。祖父が陸軍軍曹としてフィリピンへ行き、昭和20年6月戦死。生き残った親戚に連れられ、祖母と父は五島へ戻って来ることができた。戦争のせいで父は、父親の顔を知らない。
(写真のみ残る)

世界で唯一の被爆国である日本。そして、その原爆が投下された長崎。私達、長崎県に暮らす人間は、世界中のどこよりも、平和を求める気持ちを訴えていかなければならないと考えます。どうか、ご家族で、戦争の悲惨さについて、そして平和の尊さについて、たくさん会話していただきたいと願います。11時2分を再び引き起こさないために。